体育嫌いな生徒の要因

－なぜ体育嫌いの生徒はバドミントンを選ぶのか－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野　角田拓未

1. はじめに

高等学校学習指導要領（保健体育編）によると、３つの目標が定められている。その中でも特に、「生涯にわたって継続して運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を養う。」といった生涯に渡った運動習慣の確立に向けた支援に関して体育教員は求められていると考える。ではまず運動習慣とは具体的にどういうことなのか。厚生労働省の健康日本 21 によると、「週 2 回以上、1 回 30 分以上、1 年以上運動をしている者」を運動習慣を有するとしている。強度としては、定義されてはいないが、一般に中等度の運動が勧められ、自覚的には「息が少しはずむ」程度となっている。これを踏まえ、厚生労働省の令和元年国民健康・栄養調査報告によると令和元年度の 20 歳から 70 歳以上の 2,816 人を対象とした運動習慣の有無についての調査を行い、2,006 人が運動習慣なしと報告している。また、これらを年齢別に集計したが全ての年齢において運動習慣なしが 6 割以上確認された。この結果を踏まえ、成人以上の運動習慣について問題視するべきだと考える。運動習慣を有さない原因として重松らによると小学校から高等学校における体育に対する感情が大学時の運動習慣と関連し、小学校高学年、中学校、高等学校において 2 つ以上の校種で過去に否定的な感情を有した場合運動習慣を有さない。また、一旦体育に対して否定的な感情を有するとその後も否定的な感情になりやすいと報告している。よって高等学校での体育の好き嫌いが大学時や社会人での運動習慣に大きく関連すると考えられる。では次に体育嫌いについてだが、古川らによると、運動やスポーツを手段として、計画的・組織的に体育教師または小学校の場合担任が行う体育授業に対して、体育学習場面における特定の事柄（原因）により非好意的あるいは消極的態度を形成し、学習者が否定的な心理状態になることだと定義している。また、具体的な要因は教師の指導の仕方、教師の人間性、体育授業における苦痛経験などが挙げられ、教師の行動に着目した場合子供をできる、できないで比べ、上手な子供だけが楽しめる、技術中心で教師中心の授業を行うことで体育嫌いが生まれると報告している。

2.調査目的

体育に否定的な感情を有する生徒の要因を分析し、卒業後の運動習慣の定着に向けた支援を考察するための調査を目的とする。

3.調査内容

3－1 質問紙調査

（1）実習校　山梨県内の公立高等学校

（2）実習期間　2022 年 6 月～12 月

（3）調査対象　実習校 1 年次 226 名

（4）調査内容

①授業を受ける前の体育へのイメージ

②イメージに対する理由

③運動活動歴

④現在所属する部活動

⑤授業を終えた後の体育へのイメージ

⑥イメージに対する理由

①と⑥は「好き、やや好き、普通、やや嫌い、嫌い」の 5 つから選択する 5 件法、他の項目に関しては記述にて回答を行った。調査結果を集計し、体育に対するイメージ別、選択種目別人

数、嫌いな理由別に分けて分析を行い、この結果を元に、体育に対して非好意的な感情を有する生徒が多く選択した種目に注目し、対象者にインタビュー調査を行う。

3-2 インタビュー調査

（1）実習校　山梨県内の公立高等学校

（2）実習期間　2022 年 6 月～12 月

（3）調査対象　体育嫌いなバドミントン選択者 16 名

（4）調査内容

①なぜ現在の種目を選択したのか

②今の授業に対しての感想とその理由

③その他

その他はインタビュー調査の中で質問とは関係なく回答したものを記録する

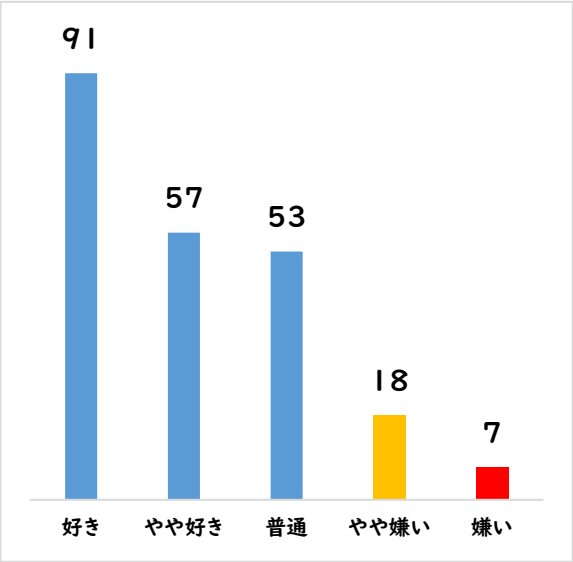
4.結果

4-1 質問紙調査

①授業を受ける前の体育に対するイメージ

好き 91 名、やや好き 57 名、普通 53 名、やや嫌い 18 名、嫌い 7 名となり、体育に対して非好意的な感情を有する生徒は 25 名確認された。

図 1.体育に対するイメージ内訳



②種目別人数と体育へのイメージ

バドミントン 82 名（好き 19 名、やや好き 21 名、普通 26 名、やや嫌い 10 名、嫌い 6 名）、卓球 65 名（好き 26 名、やや嫌い 14 名、普通 19 名、やや嫌い 5 名、嫌い 1 名）、バスケットボール 48 名（好き 28 名、やや好き 13 名、普通 4 名、やや嫌い 3 名、嫌い 0 名）、バレーボール 21 名（好き 10 名、やや好き 7 名、普通 4 名、やや嫌い 0 名、嫌い 0 名）、サッカー10 名（好き 8 名、やや好き 2 名、普通 0 名、やや嫌い 0 名、嫌い 0 名）となり、やや嫌い、嫌いな感情を抱く生徒の多くがバドミントンに多く集まっていることが確認された。

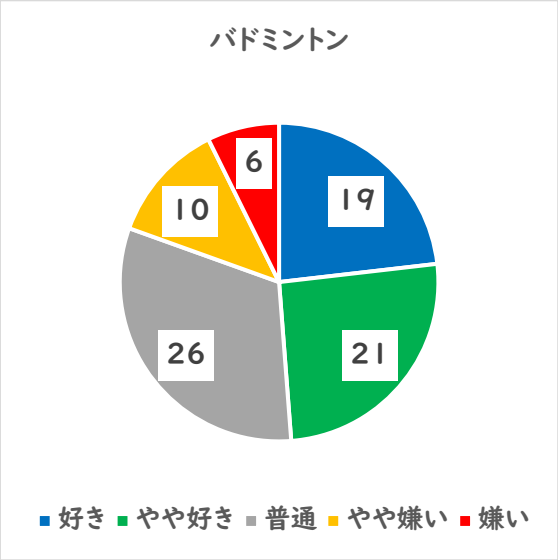


図 2 バドミントン選択者内訳

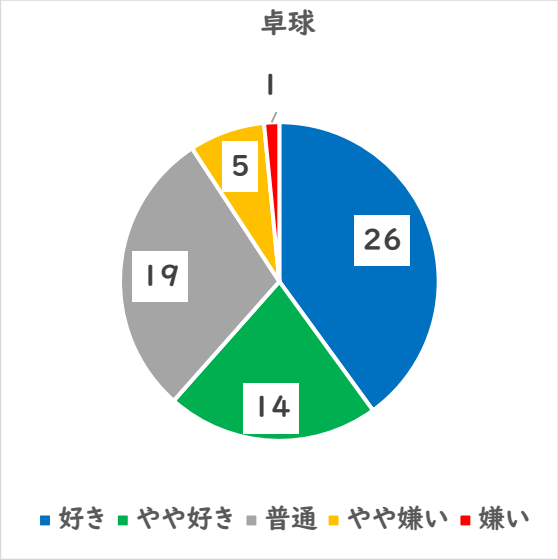


図 3 卓球選択者内訳

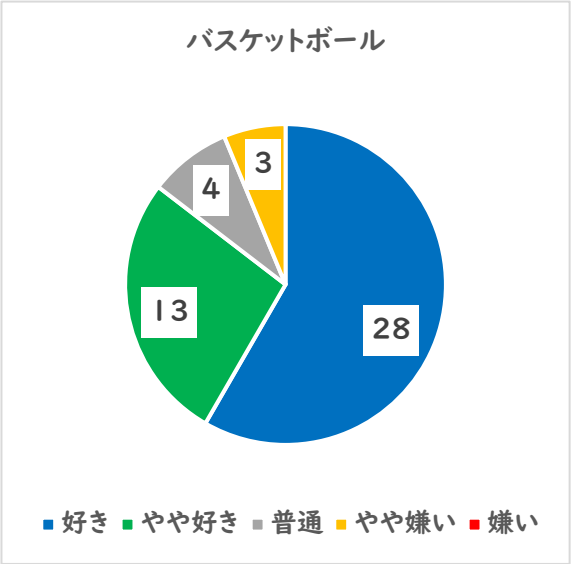


図 4.バスケットボール選択者内訳

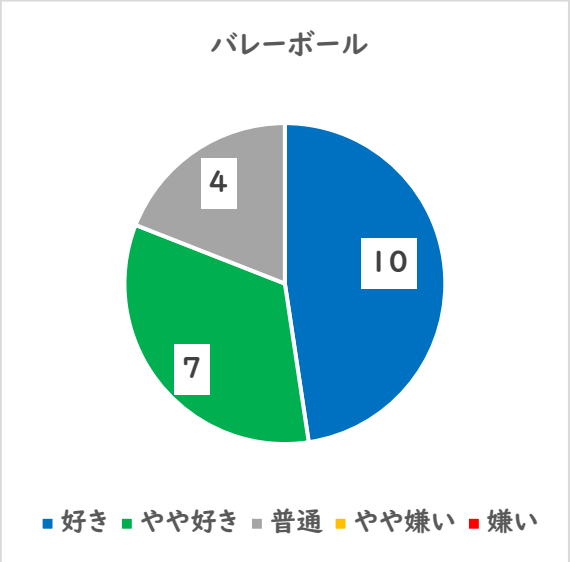


図 5.バレーボール選択者内訳

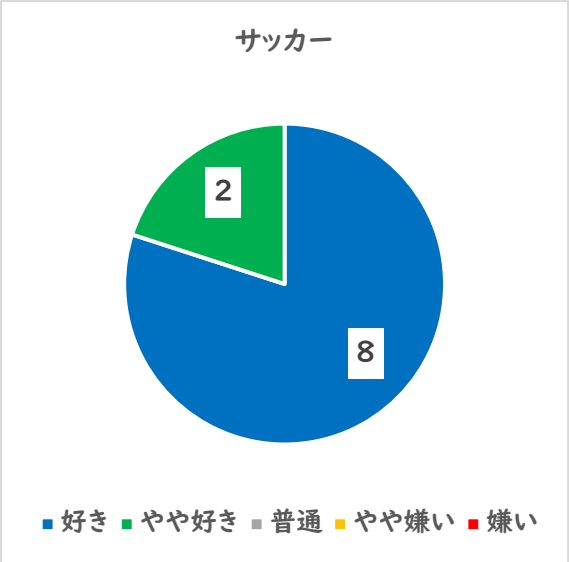


図 6.サッカー選択者内訳

③体育が嫌いな理由
体育に対して否定的な感情を有する生徒の意見を参照し、「苦手だから 14 名」、「体を動かすことが好きではない 12 名」、見られるのが嫌 3 名、疲れる 2 名、その他 4 名となった。
④質問紙調査全体の結果
回答件数 226 名全員の回答を回収した。全体の約 9 人に 1 人（普通を含めると約 3 人に 1 人）が体育に対して否定的な感情を有していた。

4-2 インタビュー調査
今回の調査では体育に対して非好意的な感情を有する生徒がバドミントンに多く集まったため、体育に非好意的でバドミントンを選択した生徒 16 名の内、欠席者を除く 14 名に対してインタビュー調査を行った。

①なぜ現在の種目を選択したのか
「友達が選んだため、自分もついていく」といった形でバドミントンを選択したと答えた生徒が多く確認された。

②今の授業に対しての感想とその理由
今の授業に対して、楽しい 7 名、楽しいっちゃ楽しい 1 名、普通 4 名、楽しくない 2 名となった。楽しいと答えた生徒の理由が、「友達と一緒

に話すことができる、友達とやっているから楽しい」といった、ここでも友達に関する要因が関係すると確認された。友達と話すことができるといった点に疑問を持ち、どのような話をしているのかを追加でインタビュー調査したところ、「バドミントンに関する話をしているのではなく、趣味に関することや恋愛に関することなど各々が自由に話をしている」ことが分かった。

③その他

チームプレーや相手がボールを奪いに来る種目に対して、難しいと感じていたり周囲に迷惑をかけてしまうといった点から、特に苦手意識を持っていることが確認された。

表 1.インタビュー調査結果

何故バドミントンを選んだのか	今の授業	←の理由	その他
・バドミントンなら好りできる	楽しい	・休憩時間に友達と楽しくしゃべることができる	
・中学の時に何とかできた	楽しい	・同じ考え方の人が集まっている	
・中学からやってきて、一番バドミントンができる	普通	・休憩時間に友達と話せて楽しい	
・小さい頃から遊びでやっていたため、ぎりできる	普通	特に無し	
・バドミントンが一番マシ	楽しくない	・遊びとは違って難しい ・友達と練習できるのは良い	
・バドミントンが一番マシ	普通	・優しい言い方でアドバイスをくれる	・チームプレーは難しい ・ボールが来たらプレッシャーが来る ・苦手な人は試合に入れない→やる気がないと思われる
・友達がみんな選んだから ・怪我をしないから	楽しい	・ひいきがない ・友達と一緒に話したり、体を動かせるから	
・友達が選んだから	楽しくない	特に無し	・サッカーはできるが、面白くない
・小学生の時にバドミントンクラブだったこともあり、1番慣れている ・チームスポーツは上手い人に迷惑をかけてしまう	楽しい	・バドミントンは好き	・スイミングスクールに年間通っていた ・難易度が低く、上手い人も苦手な人もどちらも楽しめるものがあると良い
・友達と遊ぶときにバドミントンをやっていて楽しい	楽しい	・打てるから ・適当に打ってても当たる ・先生の指導が分かりやすい （ルール説明・技術指導等）	
・苦手なやすでできる方 ・小さい頃に友達とやったことがある	楽しいっちゃ楽しい	・空いている時間に友達と戯れる ・楽しい範囲で動ける	・団体競技→動き方が分からない 個人競技→自分のミスは自分のせいになる ・バスケやサッカーはボールが来たら疲せられる
・小学校のクラブ活動でバドミントンをやっていたためできる	楽しい	・好きなことをやっているから	・バスケ→受き指 サッカー→暑い 卓球→つまらない
・バドミントンは一番マシ ・バドミントンはあまり動かずにできる	普通	・休んでいてルールが分からない ・友達とやれるのは楽しい	・集団競技→周りに迷惑をかけてしまう ・戦うのがキツイ→苦手な子を集めたグループを作ると良い
・ぎり楽しめそうだから ・友達が選んだから	楽しい	・優しい人が多い（友達）	

5.考察

今回の調査結果より、体育に対して非好意的な感情を有する生徒は 25 名と全体の 9 人に 1 人いることが確認され、その生徒の多くがバドミントンを選択していた。選択理由がバドミントンに対して参加意欲があるのではなく、友達が選択したためついていく形で自分も選択した生徒が多く見られた。また、その生徒らはバドミントンの授業に対して楽しいと感じている生徒が多く、その理由として友達と会話を楽しむことができるからだ。会話の内容はバドミントンに関することではなく趣味や恋愛に関することなど自由に話したいことを話している。従って、会話というよりもお喋りをしているといった方がふさわしいと考えられる。林らの報告によると、グラウンド・ゴルフに参加する高齢者を 16 年間に渡ってスコア管理や参加意欲に関する調査を行った結果、全員が仲間と会ったりすることに楽しさを感じると回答し、60.5%がグラウンド・ゴルフが生きがいになっていると回答した。また、参加意欲についてだが、少々体の調子が悪くても出席すると 68.4%回答し、スコアについて気になっているのかに関しては、非常に気になる 15.8%、少し気になる 60.5%、あまり気にならない 18.4%、全然気にならない 5.3%となった。スコアに対してそこまでこだわりがないにも関わらず、少々体の調子が悪くても 68.4%はグラウンド・ゴルフに出席する意欲がある。その理由として森らは、グラウンド・ゴルフ参加者は、良いスコアを出すために参加しているのではなく、近所での話や社会についてなど他愛のない会話を楽しむために参加しており、身体面だけでなく、精神面に対しても健康的な効果があるのではないかと報告している。また、グラウンド・ゴルフは健康の維持増進に効果があると結論づけており、他愛のない会話を楽しみながら健康に効果のある運動を行うことができ、身体的にも精神的にも健康に効果があると考えられる。このようなグラウンド・ゴルフの特性が今回調査したバドミントンの授業の中にも存在しているのではないかと考えている。体育に対して非好意的な感情を有しているにも関わらず、バドミントンに対しては楽しみながら参加することができ、その理由として友達とのお喋りができるといったことが挙げられた。卒業後の運動習慣の確立に向けてはこの要素を大切にしていくべきであると考える。体育の授業の中で友達とお喋りをする余裕を与えることによって、参加しやすい雰囲気を作り、将来的には友達とお喋りといったコミュニケーションを取るため

の手段として運動することを選択してもらえることで、運動習慣の確立ができるのではないかと考えている。運動やスポーツと聞くと、体を動かすことが目的であると考える人は多くいると思われるが、体を動かすことはあくまで手段の１つであり、友達との交流やコミュニケーションを取ることを目的とすることで、運動への参加のしやすさや運動の機会を与えることができるのではないかと考えている。

引用参考文献

・高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）
解説　保健体育編
・厚生労働省　健康日本 21（身体活動・運動）
・厚生労働省　令和元年国民健康・栄養調査
報告　第 2 部　身体状況調査の結果
・「運動嫌い」「体育嫌い」の実態と発生要因
に関する研究 古川麻衣 山谷幸司 笹生心
太（2015 年 10 月）
・小学校から高等学校までの体育の好き嫌い
と大学での運動習慣 重松 良祐, 西澤 誠人
・高齢者スポーツとしてのグラウンド・ゴル
フの特性 森 楙・湯地 宏樹
（2020 年 6 月 30 日）